

### 【インタビュー】 守っていくもの変わって いくもの：現代における能の輪郭

観世, 喜正

---

(出版者 / Publisher)

野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽の現在と未来 (能楽研究叢書 ; 5)

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

48

(発行年 / Year)

2015-11

## 【インタビュー】

### 守っていくもの変わっていくもの—現代における能の輪郭

観世 喜正

聞き手：山中 玲子

山中：今日はお忙しい中、ありがとうございます。今日のこのセミナー、観世喜正さんと午後の野村万蔵さんとお二人にまずご予約を聞いたのですが、お二人が合う日が9月から12月の中で今日1日しかありませんで、それでしかも喜正さんはお昼まで、万蔵さんは午後2時以降ということで無理やりここに詰め込んだ次第です。

早速ですが、能楽の中で「守っていくもの、変わっていくもの」ということで、能楽界というか、能を取り巻くシステムがどのように変化してきたかというお話と、それから演じられていく舞台の上での能そのものがどう変わっていくか、作品もそうですし、演じ方の変化もあると思いますが、能そのものについてのこと、両方のお話を伺いたいと思っています。

もうご存知の方は多いと思いますが、観世喜正さんは、能全体のことをいつも考えていらっしゃる方なので、能界全体をどう変えるかというお話がとても面白いのですが、ちょっとそれはあとに残しておきまして、まず新作能のことからお聞きしたいと思います。ずいぶんたくさん新作能に関わっておいでかと…。

観世：たくさんなのか、ちょっと微妙ですけども、今日もここに来るにあたっていろいろ新作とか、復曲能に型を付けた台本を収めているコーナーをごっそあさってましたら20ぐらいありました。

山中：その中でも関わり方によっていろいろ違うと思いますが、一番深く関わられたのは。

観世：先程ちょっとご紹介いただいた神遊というグループをやっている、その中で〈麦溜〉というスコッチウイスキーの精が出てくるという大変、荒唐無稽と自分で言うとおかしいですが、スコットランドが舞台になるような作品をつくりました。これは自分たちのグループがやったものですので、だいぶ一生懸命関わったものだと思います。

山中：新作能というのはそれこそ、悪い言い方をすれば、掃いて捨てるほどある、という中で、あえてその〈麦溜〉をつくられたときに、心に留められたポイントがありましたらお聞かせください。

観世：これね、その、私自身が新作が得意か、好きかという、それほどではないのですが、「神遊」というグループの活動を約20年前に始めたときに、はじめて能を観ていただく方に観やすい能、それから観慣れている方にも、うんと頷かせる質の高い能、それから例えば能楽堂ではない屋外とか、ホールとかで上演したときにいろいろ観賞に耐えられる、興味を持ってもらえる能、いろんなバージョンを広くお見せしようというような考えがありました。その中でいろいろ取り組んできて、普通の曲はだいぶたくさんやらせていただいたので、では、復曲能もやってみようということで、これは自分たちではなくて、うちの家元が復曲した〈箱崎〉というのをさせていただき、順番としては、次は新作の、ということで。まあ、モチベーションとしてはそういう展開ただけというのではないのですけれども、そんな中でやったというのが、その〈麦溜〉をつくった最初の直接の動機ですね。

山中：パンフレットを読ませていただきますと、聞きやすいように、詞章に凝らないというようなことが書いてありました。

観世：そうですね、要するに、例えば、和歌を引用して韻を踏むとかという

ことではない、一応、古文っぽい感じの脚本にするのだけれども、現代語ではやらないのだけれども、文字をみないと意味がわからないというようなことではなくて、やはり聞いても理解できるような文体にしたいねということで、最初の骨組みのプロットは観世元伯が作りました。今「マッサン」で話題の余市のニッカのところへ取材と称する酒飲みに行きまして（笑）、ウィスキーを飲みながらプロットを書いて、ただ、それではなかなか作品に仕上がらないので、私どものお弟子さんの中で研究をしている若い人に頼みまして、ちょっと膨らませていった。その中で心掛けたのが「あまり凝らないでね」ということでした。

**山中：**以前、ある能楽師のかたが、「世阿弥の能はいい、すっきりしている。それにくらべて、新作能というのはくどい」とおっしゃったことがあります。つまり、やはり能楽師ではない人がつくるから、「ここを1つ減らしてくれたらやりやすいのに」と思うようなものが多いとおっしゃって。

**観世：**お書きになる方、書くことが本職だったりされると、あれもこれもたくさんやりたいと思うのですよね。それをもらって、やはりこちらもいろいろとやりとりをして、その膨らんだものは削ってどういうふうにすればよいか、という作業をすればいいのではないのでしょうか。もらった原稿をそのまま能にしようとすれば、当然、ボリュームがあり過ぎるということはあって、それは作業手順だと思うのですけれども。

**山中：**今回のこの〈麦溜〉では、その順番が、先にまず演者の方たちがつくってから、というのが面白いと思いました。能は、歌舞伎などと比べると、研究者と役者とが組んで仕事をする事が多くて、新作なども、役者が勝手にやるのでもないし、研究者が勝手なことをこねくりまわしているのでもなくて、両方で力を合わせてというのが多いと思います。でも一方で、そんなに研究者が関わらず、役者がやりたいようにやってみてもいいのではないかなとも思うのですが。

**観世：**要は、台本とか、脚本を書ければ別ですが、それが難しい。この3月でしたか、兵庫県の但馬で〈田道間守〉という新作能があって、これは京都の田茂井廣道さんとやったのですけれども、彼はこつこつとずっと自分で全部、原稿というか、台本を書いていた。こんな才能があるんだと、非常にその、大変なことだと思ったのですけれども。世阿弥の言うように自分で作品を書ければ一番いいはずで、そういう例もたまにはあるということですね。

**山中：**〈麦溜〉の場合は、能のパターンにきちんと当てはめて作られた新作能ですよ、わかりやすい。やはりそれは、能をあまりご覧になったことがない方でも親しみやすいように、門戸を広げるとか、ハードルを下げることを考えてつくられましたか。

**観世：**まあ、いろいろあるのですけれども。結局、定型の能であれば、何か本説があって、坊さんがどこかにいくと、ゆかりものが出てくる。本来それでいいはずなのですよ。でも今はもう、ゆかりの桜とか、ゆかりの合戦場とか、和歌を一首とか言っても、だれも共感しようとしません。まあ、お酒の話ならばわかるだろうと。実際、お酒系統のスポンサーがちょっとついたり、バーテンダー関係者とかがたくさん来たりとか、その流れの中でお酒の試飲会という「おもてなし」を出したら、通常と違ったかたちでまた新しいファン、ファン層というか、能を観てもらう層の獲得というふうになります。日本の伝統芸能といっているのをちょっと洋風な要素を入れてどうなるかというようなことはあったので、ちゃんとした新作能かといわれると、我々もちょっとこそばゆいもありますが、一応、能のかたちに当てはめて、さっき言った、凝り過ぎないかたちにしたということです。

**山中：**新作能、創作能、現代能、スーパー能…と色々な言い方があるので、すけれども、その辺の分類はどのように。

**観世：**仕掛ける側にはいろいろ思惑もあるかもしれません。あとは研究者の

先生方が分類されるのがいいと思うのですが、「スーパー能」は、梅原猛さんが関わっているものをそう呼ぶようですね。新作能というのは、全く新しい作品が新作というふうに我々は認識してしまっていて、今言った〈麦溜〉なんかは能の形式に則って、前シテ、後シテ、ワキ、子方、地謡、すべて登場人物も能の枠組みのなかに収まっている。創作能はたぶんちょっとこれはエクスキューズ、言い訳でして、能以外の要素も入れてみよう。例えば、コンテンポラリーダンスの人が入ってきたりとか、それから楽器の人が入ってきたりとか、能以外の要素を入れて、能の要素を踏まえつつ、新しい展開もあるよというようなときに、概して創作能という言葉で逃げようという…。逃げというか、まあ、まさに「新作能とは何ぞや」という問いに結論を出さずに興行を打つときに「創作」という言葉を使っている事例が多いように感じています。

**山中：**ということは、やっぺらっしやご本人たちも、創作能というのはもしかして能の範囲から外れるかなと思っていらっしやということですね。

**観世：**私は常々思っているんですけども、大体、創作能をやろうと言い出す人はごく少数の人間で、ほかの人はいわば雇われていくわけですから、そのコンセプトづくりのところに関わっていないわけですね、地謡なら地謡、囃子なら囃子で、雇われていく。「ああ、いいですよ、何でもやりますよ」という流れの中で関わっているので、その一番の核心部分の人の思いがどの程度かということとはわからないところがあります。また、その核心部分の人の、言葉は悪いですけども、端的にいうと能力の問題もありますし、それから当然、スポンサーの問題とか、いろんなこともあるので、その関わり方の濃淡というのは、立場によって非常に違ってくると思いますね。

**山中：**「シアター能楽」のリチャード・エマートさんがつくっていらっしやような英語能は、能として認めてもいいとお考えですか。

**観世：**私は英語がわからないのであれなのですが、先程のチェコの狂言の話

が今後の外国展開の1つの方向ではないかと思います。言葉だけは自国語にして、チェコの人にはわかりやすい。それから狂言のリズム感も残した翻訳をすると、これはひとつの方法だと思うのですね。英語能も今言った、まあ、例えば、能の伴奏は七五調の謡を八つに割って伴奏しているわけですが、そういうところから逸脱しないようなリズム感で英語ができて能になれば、能のひとつと言ってよいと思いますね。

エマートさんとも一緒に仕事をしたことがあって、外国人の学生を教えてみると、日本人なんかより上手なのです。先ほどもちょっとお話に出ましたが、こういう子たちが能を本当にやりたいと言ったときに、それを受け入れる素地なんて、何もこちらにはないのですけれども、実力ではあっちに持っていかれてしまいますね、本当にね。

**山中：**着付けまできちんと勉強して。しかも、あの人たちは演劇関係の大学に行っていたり、いろいろな勉強をしていて、基礎はできている人たちが多いので。そこのところが、日本人が、たとえば私たちがちょっと装束を着てみたいと思うのとは全然違うのだろうと。

**観世：**着付けに関しては、1週間の合宿というのはよいアイデアで、我々能楽師もそれをやればいい。着付けが下手な役者もいるのですけれども、そういう合宿プログラムとかをやって、1日中、着付けていけば、みなさんだって、すぐできるようになりますよ、技術的な問題ですから。

ただ一方で、「能として認めるかどうか」というのはもうちょっと内面的な問題があるので、外見的なものがちゃんとできれば能なのかというと、そこもまた違うだろうというのが、まあ「古い意見」ではあっても、それがあるので、そこは少し問題ですね。

**山中：**でもその「違うだろう」というのは、「外国人にはわからなくて、日本人にはわかる」という違いではないですよ。日本人でも外国人でもセンスがある人にはわかるし、能のことを勉強している人にはわかる、というも

のではないのですか？ そうでもないんでしょうか？

**観世**：まあ、だからさきほど裏でお話した「朝青龍の相撲」ですね（笑）。

**山中**：その話は微妙ですね（笑）。でも、ちょっと微妙ですけれども、ここでもう一度お聞きしてもいいですか、その朝青龍の話。

**観世**：あるとき〈道成寺〉があって、私は地謡で関わらせていただいたんですが、若手でもない中年、僕らぐらいの世代がすごく密度の濃い〈道成寺〉を演じた。そのとき、観世流の大変口のきつい先輩が、「モンゴル相撲だな、あれは」とおっしゃったのですよ。その先輩が言わんとすることは非常によくわかって、別にどこも間違っていないし、まあ、派手派手しくていいのだけれども、何か足りないということをたぶんおっしゃりたかったのだと思います。これはモンゴル出身の相撲の方には非常に申し訳ないですけれども、当時は朝青龍の時代だったので、我々にわかりやすかった。要するに、技が決まればいいというのではなくて、そこに何があるのか、中身はどうだということを、我々に向かって言いたかったのだらうなということがよくわかって、以後、すごくそのフレーズが頭に残っているのです。

相撲自体は、勝ち負けがはっきりしているからいいですね。芸能の世界は勝ち負けではないのですけれども、もしかしたら時代の背景として、もう、能にも「勝ち負け」が求められているのかもしれないということもある。言ってみれば、相撲なんて本来、神事だったわけで、要するに、八百長なんか当たり前だったわけですけれども、それが今は、スポーツと置き換えられてしまった。あれは本当はただのスポーツではないのですが、こういう時代の中で相撲のほうも、自分たちがどういうふうに変化してきているか、わかってないのですよね。

不用意に、なのかどうか、外国人を受け入れてしまっ—外国人が悪いというのではなくて—、ただ「勝てばいいんだろ」となったときに、本当のお相撲はどこにいったしまったんだということを考える間もなかったのでは

うし、もちろん伝承するということもできないでしょうね。でも「他山の石」ではないですけど、我々も今のこういう早い時代の流れの中でどうしたらいいのかということは、答えは簡単には出せないですけども、常々心掛けていたほうが、心に留めておいたほうがいい話だなとは思っています。

**山中：**はい。微妙な難しい問題を、誠実にわかりやすく話していただけたと思います。

では、今の話から少し広げていきたいと思うのですが、喜正さんは、「喜正の会」という会を持っておいでです。この会が、それこそ「勝てばいいんだろう」ではないところで、観世喜正というひとりの能役者が自分の修業をしていく、その結果を本当にわかってくださるお客さんに見せていきたいという会ですよ。

**観世：**はい。

**山中：**一方で、いろいろな普及活動をなさっていて、いくつも会をつくっていらして、能を何にも知らない人でも、気楽に観られるような「のうのう能」みたいなものもあります。そここのところ、喜正さんとしては、ずうっと連続体でつなげていくのではなく、二つの方向の区切りは、はっきり付けておこうということでしょうか。

**観世：**若い頃はあまり能が好きではなかったし、自分に能が上手にできると思わないのですが、新しい方に向けて発信をすること、今後70歳、80歳までこの仕事をやるなら、そういうところの布石を打ちたいという気持ちがあって、初心者向けの公演みたいなことを若い頃に始めました。お客様も常時いらっちゃって、ずっと続いています。初心者というか、はじめての入門の方というのはいつでもいらっしゃるわけで、いつも言うんですが、日本の人口のまだ1億何千万人は能を観ていないでしょうから、その1億人に向けての窓口は開いておきたいわけですよ。それで何度かご覧になれば、あとはお客さまが自立して好きなものを観てくださればいいのですけれども、ただ、

自分の芸の話をしていくと、いつもいつも〈羽衣〉や〈葵上〉ばかりやっているわけにはいかなくて、いずれは〈定家〉のような曲もやらなくてはいけない。もうちょっとやはり能楽師としてきちんと向き合って、客席の顔をうかがわずに、うかがわずというのは変なのですけれども、自分の、きちんと稽古されたことをやる場が必要だということで、公演の趣旨を分けたということがあります。

もともと能には定例会と称する月並の定期公演形式があって、いまやそれがほぼ崩壊の危機に瀕している状態なわけですが、おかげさまでうちは舞台もありましたし、立場的にも跡継ぎだったので、わりとやりたいことをやらせてもらえた立場だったので、自分がやったら次は同じような世代、若い世代にもチャンスを与えて多くの人に来てもらうというふうには展開をしてきました。その中で30代半ばぐらいになって、これは自分の芸をもうちょっとなんとかせねばいかんなど、向き合うための公演として自分の会を作ったということですね。

**山中：**「のうのう能」でいくら〈羽衣〉をやっても、〈葵上〉をやっても、あるいはそこで初めての方にわかりやすいようなかたちを工夫しても、そのことは一切、〈定家〉や〈芭蕉〉をやるときの自分の身には返ってこないということですか？

**観世：**そんなことは全然ないですけれども、私はちょっと人よりチャンスが多いのもあって、決してその、能を軽視しているとか、使い分けしているということではないのですが、ホールで1,000人、2,000人ぐらい2階席があるところでやる能と、きちんとした能楽堂で、きちんとしたメンバーで、よくご存じのお客さんに、ぐっと集中してやる能とでは、全然違うと思います、同じ〈羽衣〉をやっても、それはちょっと見せ方を僕は変えているので、そういう意味では、もう見所のこの辺、結構寝ているから、省いちゃうというようなことをやっています、実際に。それは手抜きではなくて、これ以上もたないだろうと。だけれども、「喜正の会」のようなときにはそんなことは

しない。

**山中：**長いこと外国旅行をして日本に帰ってくると、ああ、やはり日本はいいなと思ったりするみたいに、「のうのう能」とか「ホール能」などをたくさん経験したせいで、若いときにはわからなかったもっとコアの部分の能の良さがわかった、というようなことはありますか。

**観世：**そういうことは、言葉では言えないですけども、感覚的には理解をされていて、ありますね。

**山中：**やはりここが生きる道だ、生きる場所だみたいな。

**観世：**なんか三番目ものとか、大嫌いだといって、こんなものをやめればもうちょっと観客は増えるんじゃないか、自己満足で〈定家〉とか、〈芭蕉〉なんかやらなければいいぐらいに、若い頃は思っていたのですけれども、年齢・経験を重ねるうちに、こういうものを伝承し、保持していかなければいけないという実感は最近出てきました。

**山中：**さっき「お客様の顔をうかがわないで」とおっしゃいましたよね。横道万里雄先生が昔やはり、「能というのはお客様の顔をうかがわないでよかったからこうやって芸が洗練されたんだ」というようなことをおっしゃっていました。あれは1980年代ぐらいの話ですから、横道先生がおっしゃっていたのは、その時代の背景もあると思うのですけれども、本当に集中したお能というのは、だから「お客様の評判を気にしては駄目んですよ」とおっしゃってました。

ただ、ちょっと気になるのは、よく演者の方たちが、お客さんに受けることを何だか下品だと思っているところがありますよね。「お客さんに受けるのではなくて、僕は舞台の上で一緒にやっている仲間に認められたい」とかね、そういう言い方というのはよくあると思うのですね。前に、喜正さんが、「能楽師のうちの一部は観客のほうを向いていないで楽屋を向いて能をやっ

ているんだ」とおっしゃったことがあって、本当にうまい言い方だなと思ったのですけれども、その辺のところはどうでしょうか。

**観世：**今は多少変わってきたかもしれません。その「楽屋を向いて」というのは、稽古してもらったとおりにきちんとやれるかどうかということで、「お客様さまに向かってこれをしろ」と教えてくれる人はあまりいなくて、舞台上だけできちんと完結させろということが多い。

例えば、いい地謡を謡っていてもすごく声が小さい人がいて、すごい風情が出ていていいのだけれども、声が聞こえていないでしょ、ということがあがる。聞こえていないというのは、有料で公演している以上、僕はそれはちっとも良くないと思うのですね。聞こえたって聞き取りはしないのだけれども(笑)、何かやはりせめて聞こえていなくては、と思う。それではどうすれば客席に聞こえるのか、ということを考える必要があると思うのですけれども、そんなことはだれも考えていないのですよ、だれもそんなことは教わっていないし。さっきのお話にあった、あつという間に炎上してしまうような世界、「今日観に行ったけれども、何を言っているかわからなかった」というので炎上してしまうような世界を相手にしていくときに、今後、能界もある程度そういうことを意識しなくてはいけないのかなと。

今も山中先生、見ているでしょ？お客さんを。たぶん寝始めたら話題を変えますよね。能の本番の舞台上でも、そういうなんていうか、全体の流れを見て「今日はコンパクトにいこう」とか、そういうことは考えたほうがいいかもしれない。

**山中：**9月にNHKの、〈紅葉狩〉をなさったときに、私が副音声解説をやらせていただいたのですけれども、あの副音声というのは本当に、宝生流を「むろお流」と読んでしまったり、金春流というのはなんて読むんですかとおっしゃるような、能のことを何も知らない方たちもたくさんご覧になるのですね。そういう人も見てくださるというのはわかっているのですけれども、いざ副音声を入れようとするときに、喜正さんの謡の邪魔にならないように

ということを考えてしまう。それは実は喜正さんのことを考えているのではなくて、自分の評判のことを考えていて（笑）、あとで喜正ファンに「あの解説はうるさかった」と言われたくないなと思って、遠慮してしまうのですよね。でも本当は、そういう人は、副音声を消せばいいのだから、解説をもっとががんとすればよかったと思ったりもする。やはり、なんて言うのですか、「通」の圧力のようなものがありますね。

観世：そうですね。

山中：それが能をずっと守ってきた部分もあるし。

観世：それはその通りで、お弟子さんをはじめ、そういうファンの方の圧力というか、その熱い支えをいただく、パワーというのはとても大事だけれども、今と全く同じ（紅葉狩）で、10年ほど前にDVDを出したんです。札幌テレビの公演でやったDVDなのですけれども、編集のときに、すごく能に対して理解のある担当者が、「ここ、長いですね、『時雨を急ぐ紅葉狩』から始まって、『まづ木のもとに立ち寄りて、四方の梢の…』まで、これ、こんなに長くないと駄目ですか」と。尺にしたらほんの数分ですし、謡はそこが一番きれいな謡ですけれども、テレビ屋さんの的には、「もう持ちませんよ、これ」というのがわかっていらっしゃるのですね。たぶん一般感覚はここだろうと。これは、自分にとってはいい指針になったので、例えば、ホール能とかのときにはもうどんどん抜いてしまいます。それは謡をないがしろにしているということではなくて展開を考えて。

山中：そうですね、展開にはあんなに長くなくていいのですよね。

観世：そうです。

山中：私も実は自分で解説しているときは、うまく打切のところに入れたとか、謡が始まる前に全部情景描写を説明したとか、得意になっていたのですけれども、NHKの番組を見たら、「長い！」と思いました（笑）。

**観世：**無言の空間になってしまうんですね。能では謡が流れているけれども、それは普通の人にとっては宇宙語がゆっくり展開されているにすぎない。

**山中：**今、いったい、日本中でこの番組を見てくれている人の何人が、リモコンを押してチャンネルを変えてしまったらどうか、と思って、自分の責任だと思いました、ここで逃げないように解説を入れれば良かったと（笑）。

**観世：**ちょっと話が変わるのですけれども、国立能楽堂で字幕を入れたときに、ほとんどの人がぶーぶー文句を言ったんですが、そういう人たちには、「今の若い人はチャンネルを変えながらじゃなきゃ、能なんか観ていられないんだ」っていうような実感がありませんよね。前の座席の人の字幕がちらちら映って邪魔だとか、そういう話ではなくて、今後舞台を観るときにはこんな補助機器が必要になってくる時代をどうするか、せつかく考えるチャンスと国家予算がついたのに、全否定していると良くないと思うのです。

**山中：**なんだか、全否定するほうが、芸術だけを考えているのがかっこいいというような、それが能の世界に蔓延しているというか。

**観世：**それはとても素敵なこと、大事なことなのですけれどもね、根源的には大事なことだと思うのですけれども。

**山中：**なかなかそれだけではやっていけないところがありますよね。今、だんだん普及の話に向かってきましたので、このまま「ご当地ソング」的な新作能のお話に移っていきたいと思います。

**観世：**はい。これ、小山、栃木県小山ですね、〈小山安犬〉という、世阿弥の時代に出てきている古い作品の話をもとに、うちの中森がやったのですが、小山市の市政50周年記念の行事なのです。それで、大小鼓や笛の後ろのひな壇に、紋付を着ている男女がいます。これは、市民の皆さんなのです。市民参加というかたちの新作能なのです。能楽師だけがしかるべき予算なんかをもらって新作能をやるのではなくて、市民参加のかたちでやっていこ

うと。子方も出たりするので、子方も地元の子どもを稽古して行って、当然、地謡にも地元の人たちがはいる。一番最後列にはプロ、我々の能楽師がいて、地頭とかをやっているのですけれども。

(ビデオ再生)

**観世**：市側の映像なので、市民がいっぱい、こう、映し入っています。今言ったその、能楽師だけが舞台上で能をやるのを観にきてもらうのではなくて、こうした、地元の人も参加してもらう。究極の参加型で、こういうものも一方では行われていたりします。

たぶん今日来ていらっしゃる能のコアファン、熱心な方は、いわゆるその、言葉は悪いですが「素人芸」が観たいのではなくて、どんな能ができたか、その質を確認したいと思われるでしょうけれども、例えば、自治体などからいただいたお仕事であれば、市民参加というのはものすごく重要なことなのですね。実はこれが、作品内容の評価はともかく5年にいっぺん、必ず行われていて、もうすでに3回か、4回、行われているのです。定着をしていて、その5年ごとにこういうような新作に予算がついたりする。これもひとつ、能を今後根付かせていくあり方なのかなと。

私も2度ほど地頭を承って、はじめは「どうしたらいいのだろう」と思ったのだけれども、実はあそこ、ひな壇の裏には謡本が置いてあって、本を見ながら謡っているし、非常にうまくいくのですね。(映像を観ながら)このあと子方が出てきたりするのかな。市民の方の顔がアップになる。地元の子供が出てきました。拍手が起きてますね。

こういうことがあって、非常に古い作品だということだけにとらわれずに、外的な演出というか、公式の部分でこういう市民参加のようなことを考えているわけです。

**山中**：これはみんな、中森さんが謡のお稽古などをなさったんですか。

**観世**：はい。まだ中森晶三が生きていた頃から続けて、今は中森貫太がやっ

ていますけれども。

**山中：**ご当地ソング的な能というのは、江戸時代に作られたものが多いと思うのですが、こういう世阿弥伝書にも記事が出ている曲というのは、やはり地元の方は嬉しいでしょうね。

**観世：**でしょうね、ですからたぶん、能楽研究の側からすると、今つくられたこの〈小山安犬〉の評価がどういうものになるか全くわからないですが、こういうかたちで地元では、「おらが能」というかたちで残っていく可能性が高いということがあるのですね。これもひとつの方法だと思います。

**山中：**これ、一回〈小山安犬〉という新作を作って、それを何度もやっているということですよ。

**観世：**ええ。新作能の問題は、大抵、なかなかリバイバルができないということがあるのですが、まあ、ここは市民参加型でひとつ成功している事例かなというふうには思います。

**山中：**繰り返しているうちに少しバージョンアップはしているのですか。

**観世：**したほうがいいと思うのですが、5年経つともう忘れてしまったりするので（笑）。

**山中：**では、同じテキストと、同じ作品で。

**観世：**ええ、ですから、そういうところはもうちょっと意欲的に取り組むと、もっといい作品になるとは思いますよね。



「のうのう能」にて解説

山中：子供たちもみんな入れ替わるのですね。

観世：そうです。5年経つと大人になってしまいますよね。

山中：すごいですね、それを何回もやっているというのは。

観世：それは私も非常にうまくいっている発想だなと思います。

山中：今、こういう普及の話が出ました。これ、とても面白いアイデアだ  
なと思うのですが、ほかにもお話を聞いていますと、喜正さんはたく  
さんいろんなアイデアをお持ちですよ。国立能楽堂のその字幕も、国立  
の自主公演以外でお使いになったのははじめてではないですか。

観世：たぶん、ほぼ、はじめて。大変高い使用料を払うので、その高い使用  
料を払うための助成金を、変なものですけれども、国がつくった設備に国か  
ら助成金をもらおうとしていたりするのですけれども。字幕、邪魔だとい  
う意見もたくさんあります。英語チャンネルと日本語チャンネルと、場面解説  
があると3チャンネルということだけなのですから、そういうふうにし  
てやったりしています。字幕に関してはもっと活用させるべきだと私は常々  
思っているのですが、あの字幕を、いいという意見をだれも言わない、ある  
いは言ってもたぶんかき消されているのが不思議ではないと思っ  
ているのですけれども。

山中：やはりそれも、ああいうものはないほうがいいというほうが、能をよく  
理解している人だという、みんなの思いがあるからでしょうね。

観世：でも今後オリンピックに向けて外国人が増えてきますから、完全にイ  
ヤホンガイドとか、字幕というのは設備としては必要になってくるので、常  
備されてくる可能性が高いですね。だから邪魔だという論ではなくて、どう  
やって共存していくかという論争をつくるべきだというふうには僕は思っ  
ていますが、補聴器もいろいろ問題になるのですね、イヤホンガイドも

外れてしまったり、でもたぶんみんなの理解が進むと、それはこういうふうに入れていけば、音が漏れませんか、もっと手元で操作できるよとかということがあると思うのですけれども、なかなか全員がそういう環境にないので、そういう理解が少ないということが返ってよくない。

山中：もっと高齢化すればいいのか（笑）。

観世：みんながね。だったら、能楽師がマイクをしなければ駄目で、あんなばそばそ謡っていたら聞こえやしない（笑）。

山中：そういうことを含めて、本当に大胆なご意見が多いのですけれども、もう少しその、例えば、定例会のあり方ですとか、それから今後の、本当にあの、このところちょっと別のお仕事でも喜正さんのお話を伺うと、大胆なご意見がいろいろありますので、いろいろ聞かせていただければと思います。

観世：はい。宝生流の辰巳満次郎さんなんかとお話しているのですが、能楽堂、能というのは単発公演なのですね。それで、若い頃から単発ではお客さんを集中的に呼べないので、連続公演ができないかということは常々考えました。「神遊」をやったときも、はじめのうちは世田谷パブリックシアターを借りて連続公演とか、頑張ってやったのですけれども、こっちの体力ではなくて、精神的な体力が続かなくて、なかなか実現化しませんでした。

今、アイデアとして出ているのは、人に真似をされると困るのですが、たぶんこちらが来年やりますが、1週間なら1週間、矢来能楽堂なら矢来能楽堂でもう月曜から金曜まで夜のプログラムをやっています、土日は土日のプログラムをやっています、次の週は、水道橋なら水道橋の能楽堂でやっていますというような、リレー形式でもいいので、いつでも東京の能楽堂のどこかに行けば必ず能がやっているという発信をしたいねと。演目は毎日一緒でもいい、〈葵上〉なら〈葵上〉でも構わないし、流儀が違って、役者も変わろうが変わるまいが劇団四季と一緒に構わないのですけれども、とにか

く能というものを観に来られる環境をつくったほうがいい。せっかく常設の能舞台を持っているのに、それを毎日活用できなくては非常にもったいない。今、夜だけでは駄目な方もいるので、昼の公演もやってもいいのですが、やはり席ががらがらというわけにはいかないので、必ずある程度のお客さまを見込んだかたちにしなければいけない。それは歌舞伎だってそうですけれども、そうするとそうした方法、チケット販売、展開力、当然、スポンサーも含めて、規模の拡大、今風に言えば、規模の拡大をもうそろそろやらなくてはしょうがないよねと、口を開けて待っていても無理なので。

だから、そういうことを実現化して、6年後ですか、5年後ですか、オリンピックがきたときにはどこの能楽堂でも、あるいは東京に限らず、地方でもいいのですけれども、外国の人がきても受け入れられる、今日は英語プログラムの日です、日本人のお客さんは1人もいませんぐらいなプログラムができていいのではないかという話をしています。

**山中：**そういう話は、先見の明のあるごく一部の方たちだけのお話ではなくて、みなさん付いてきてくれるのですか？

**観世：**そうなるでしょうね、そうなってくると思いますよね。「1日2回はできない」という人もいると思います。「じゃあできないなら結構」と。心身ともに自分は無理だとおっしゃる方はそれでいいわけです。でもたぶん、そういう風に変わってくるしかないでしょうね。

**山中：**びっくりするようなお話なんですけど、でも考えてみれば、それこそ10年前と今では、本当に能役者の方たちの考え方も変わってきていますよね、感じますね。

**観世：**変わっているでしょうね。逆にその、私なんかもそうなのですが、贅沢なのですが、シテ方なのですけれども、シテをやるのは、ぐっと集中して演じるという会だけにして、だんだんもう、あまり能をやらなくてもいいかな、みたいに思う人が増えてきてしまっているのですね。それはたぶん問題

で、昔はシテ方が、チャンスがないから、もうやりたくて、やりたくて、身銭を切ってやっていたのですけれども、だんだん「もういいか」みたいな風潮というのがやはり増えてきてしまって、これはやはりあまりよくないことだというふうに思うので、その辺の、カンフル剤になればと考えています。

**山中：**それは、スポンサーはどうやって見つけるのですか。

**観世：**わかりません。スポンサーを探しています。まあ、スポンサーと言ったのは、その運営に関して心配せずにやりたいわけですよ。もう僕いつも切符を手を持ちながらこうやって売って、なんかうちのお弟子さんとかがいらっしゃるのに、なんとかチケットセンターで買いましたって言われると、「なんでおれから買わないの」、つまり、「おれがこれだけノルマ持っているのに」というところがあったりして、そういうのももちろんそれは大事なのですけれども、なるべくそういうところから少し離脱をして公演に専念するようなシステムづくりをやっておけば、安住するという意味ではないのですけれども、そうでないと連続公演なんか絶対にできないので。

**山中：**その能のプロデューサーとか、事務とか、そういうことがきちんと任せられるような人が必要だという話は、もうそれこそ何十年も前からありますよね。

**観世：**能楽師の中にもそっちのほうに向いている人がいるから、舞台に立たないでそっちをやればとかという人もいるのですけれども、それは余計なことですけれども（笑）。

**山中：**うちの大学院で勉強する人たちも、能の研究者になるだけが道なのではなくて、そういう能に深い理解を持った人として活躍してくれるといいなと思います。マスターぐらいを出て。

**観世：**先程の新聞記者からの電話の話ですが、たぶん能楽協会からまわったというその話は、能楽協会の広報の部署にいたので話を知らなくはないので

すけれども、実はどこもそうした社会科学的な統計資料を持っていないのですね。この能の作者は金春禅竹ではなくて、なんとかだ、という資料だけではなくて、即物的な、世の中で役に立つ統計みたいなものをもうちょっと取る、研究とか、そういう部署というものを我々も整理していかないといけないです。総合的なものを聞きたいと言われた場合の受け入れ態勢も能楽の業界全体ができていないわけですね。

山中：そうですね。

観世：ですからそういう総合的な視野でまた汗をかくということも整えていかなければ絶対にいけないし、今後、国際発信の状態なので、訳のわからない「能もどき」みたいなものに先を越されてしまうわけにはいけないので、みんなできちんとそういうシステムづくりをしなければいけない。

山中：それは研究者もあわせて協力できることはしていきたいですし、それが大事な仕事だと思いますよね。それで、今、切符の話も出ましたけれども、お弟子さんとの関係も今の社会、すごく変わってきていますよね。その辺はいかがでしょう。

観世：昔、私が子どもの頃、祖父や父の頃というのは、やはり能の社会はわりと安泰だったのですね。というのは、お弟子さんというのは基本的にはお稽古をされるということ以上に、我々に対するパトロンとしての意識が大変強かったわけです。なので、そういう意味では、月謝をいただくということだけではなくて、自分の先生の能が、年間何番あると、じゃあ100枚ぐらいくださいとかというかたちで、それは自分が売ろうが、人さまに差し上げようが、そういうパトロネージしていただいていた。我々はそこにあぐらをかいていたというのが事実なわけです。

でもだんだんそういう方が減ってこられた。そんなことはここ20、30年前からわかっていたわけで、時代も変わってきてしまって、自分が観にもいけない切符を10枚も20枚も買ってくれるわけがないのですけれども、能界

はそういう人にずっと支えられていたので、自分たちが骨を折って1枚ずつ売るという作業は、能楽師はあまり得意ではなかった。それでもなんとかなっていたわけです。だから客席が埋まっていようが、埋まっていまいが、定例公演が毎月あれば、そこで必ず能をやっている、まあ、その、真っ赤っかの赤字ではできないけれど、低空飛行ですとこう、能を続けてきていたのだけれども、あるときから、「それじゃできないかもね」「もっと売らなければ駄目かもね」という時代が変わってきているということもあります。

今のお弟子さんなんかだと、例えば、月2回で月謝はいくらですと言って、自分は休んだから払いませんとか、平気で言われてしまうし、勝手に回数で調整してきたりする人もいます。それもよくわからないのですけれども、今、規約書を書かないとお弟子さんを取れない状態ですよ。だから先生の出る会の切符は当然買うんだみたいことを言ったら今はみんなやめてしまうので、口にも出せないです。古い時代を多少は私、知っているから、それは楽だったなと思うというだけで、今のお客さまに対して失礼な気持ちを持っているわけではないのですが。それとやはり能楽堂は300席から600席あったりすると、そこを埋めるのは大変な作業で、昔は、能が三番あれば、シテが3人いて登場人物もそれだけいるので、当然、能一番やるよりも3倍ぐらい売れるだろうということで1日に無理くり三番とかをやっていたのですけれども、今は何番やったって、自分の先生が出ているのしか観にこないから、だからそんな、朝の11時から夜の5時まで、能三番をずっと通して観ている方はものすごく少ないし、ご高齢化してお尻が痛いとか、もうしんどいとかとなるのなら、もう能を二番にへらそうと。こういう変革が目当たりに起きているわけです。

山中：実際に、今、減っているのですね。

観世：減っていますね。これ、もう、広報されていますけれども、来年から観世会は、場所の移転もありますけれども、月に二番に能を減らしていますね。宝生会も月並能は三番から二番に減らしていますよね。こういうふうに、

能の番数を減らす公演が増えているわけで、まあ、そのお弟子さんの話とはともかくとして、公演形態の変化というものはじわじわと、そして大きく起こってきています。

それから夜6時開始の公演ではだれも観に来られない。会社が終わって間に合わないから、うちは7時からやっていますが、国立能楽堂さんは、7時開始の公演は「働く貴方の」という特別のプログラムです。何でいつもやらないのかと聞いたら、あそこは9時以降は使えないので、9時までに終わらなければいけないから、7時開演ができないと、それだけの理由らしいです。そんなのはちょっと規約を改正して9時半まで使えるようにすればいいのだと思うのですけれども、そういうちょっと牛歩のような中で、それでも見せ方、公演形態の変化は起こってきているというふうに感じています。

ただ、一方で、夜はお出かけになれないお客様方もたくさんいらっしゃるわけで、それはそれで従来の昼間の公演をやればいいいわけで、まあ、我々も興行主としての意識をだいたい変えてきている状態だと思います。

**山中：**もうそろそろ時間もなくなってきたので、まとめに入りたいと思うのですけれども、その、もういっぺん今までのいろんなお話をまとめて考えたときに、何を守って、何を変えていくかという、最も大事な部分のことは、さきほど「朝青龍」の話でお聞きしましたので、最も精力的に喜正さんの立場の方こそが先頭に立って変えていかななくてはいけないと思っていらっしゃるということについて、お話しただけないでしょうか。

**観世：**変えるという言葉でいいのかどうかはともかくですけれども、やはり公演形態ということに関しては、たまたまシテ方ですし、家もありますので、そこに関して方向性を提案していけるとは思うのですね。お客さまの声も聞きながら、あるいは実際のその、そうですね、現場の声も聞きながら変えるというか、より良い公演形態、もしかしたら能楽堂で観ないほうがいいのかもかもしれないかということも含めてですけれども、椅子がいいほうがいいとなれば、椅子のきれいな劇場で常設公演をやったほうがいいのかとか、いろ

んなこともあるので、そういう見せ方の問題、これはいくらでもいいほうに変えていく。

能の中身というか、自分が関わることですので、これはいじってしまっただけとはいけない部分というのは、よくよく吟味をしていかなければいけないですが、よく「クリサシクセ抜き」といって、江戸時代ぐらいからやっているわけですよ、いろんな理由があるのでしょうかけれども。冗漫だと思っているのであれば、そうした演出に関するところや、台本に関するところの再整備ということも必要なのかもしれないですね。台本というか、謡本に関する権限は家元にしかないわけで、それを1曲1曲、精査していくというのは考え方が違うと思うのですが、省略していいところ、いけないところ、こういったところやなんかは考えて、より密度の濃い、いい能ができるように考えていくべきでしょうね。

それからさっきの〈麦溜〉という新作能を神遊でつくったときに、僕は、ほかのメンバーが囃子方なので「出囃子をなんとかしてほしい」と言いました。能では、登場の音楽が、大小モノでは〔次第〕と〔一声〕しかなくて、太鼓ものなら〔出端〕と〔下り端〕と〔早笛〕〔大ベシ〕しかない。「ほかのはないの？スコットランドだよ」というような話をして（笑）。特に、〔次第〕は「段を取る」という本式の演奏をすると、イヤーという頭が入って、お客さんはなんとなく「ここ出てくるかな」と思っていると、また延々と続く。嫌になってしまうと思うのです。僕が見ていても嫌なもの。でも囃子方はそういう手組の寸法の中でずっと稽古をしているので、ここで曲の位や趣をつくることに慣れているから、1個減らそうとかという簡単なことでは処理ができない。

もちろんその気持ちもわかるんですけども、なんかそういうことの工夫、それは能の台本をないがしろにしているのではなくて、さっき言ったペース配分みたいなことをもっときちんと考えて、いい能をやるようにもうちょっと、議論ができたらいいなというのは切実な思いです。

山中：そろそろ時間となって参りました。実は喜正さん、今日これでまた次のお仕事にいらっしゃらなくてはいけないので、今日はこれでお別れになるのですが、来週、コメンテーターとして来てくださいますので、来週は、今度はもうちょっと広い現代演劇全体のお話なども含めて、その能の立場からお話をいただきますので、もしよろしければ、よろしければというか、ぜひ来週もということで、このまま続きはまた来週ということで。

観世：はい。失礼いたしました。どうもありがとうございました。

山中：ありがとうございました。